

1 国語科における教育課程実施上の課題と指導上の留意事項

(1) 教育課程実施上の課題

- ① 国語科における言語活動の充実を図る授業づくりの推進
 - ・ 学習指導要領全面実施後の1年間で、国語科においては、授業改善が全国で関係各位の理解と協力をいただきながら進んできている。成果として、言語活動の充実を図ることで、子どもたちが一層主体的に学習に取り組む姿が多く見られるようになってきている。
 - ・ 国語科における言語活動の充実のために、次の点を押さえた授業を再確認する。
 - ポイント1 当該単元で付けたい力を見極める。
 - ポイント2 付けたい力に最適な言語活動を選定する。
 - ポイント3 言語活動を、単元を貫いて位置付ける。
 - ポイント4 子どもの「大好き」「お気に入り」「伝えたい」などの主体的な意識を生かす。
 - ・ 単元を貫いて位置付ける言語活動は、目の前の子どもたちに付けたい国語の能力を確実に付けるためのものでなくてはならない。そのために、多彩な言語活動の開発をしていくことが重要である。教科書教材等を手がかりに、教師の発想を生かした多彩な言語活動の開発がより一層求められる。
 - ・ 単元を貫く言語活動を構想するときには、その言語活動の具体的な内容やパーツが明確になっているかどうかを確かめる。例えば、リーフレットで場面の移り変わりを紹介する言語活動に取り組むときには、リーフレットの具体的な内容やそのパーツを明確にすることが重要である。そのためにも、言語活動の種類や特徴の分析が重要となってくる。(H24.4月「初等教育資料」特集Ⅱ参照)
 - ・ 児童の課題解決の過程を重視する。そのために、学習の見通しを立てるための導入、単元の展開部(いわゆる「第二次」)の学習過程を工夫する。
 - ・ 学習指導案に、どんな言語活動を位置付けるか、その言語活動の特徴は何か、その特徴は、単元の目標の実現にどう結び付くのか、といったポイントを記載することで、単元を貫く言語活動がより明確になってくる。
- ② 系統的・重点的な学習指導を行うための年間計画の作成と活用
 - ・ 国語科は、算数科などと違い、当該単元でつける力と指導事項が1対1対応になっていない。そのために、国語科の3領域1事項全体を調和的に指導できるように、年間を見通した指導計画の作成が重要である。
 - ・ こうした点から、例えば縦の列に指導事項等、横の行に単元名等を配列した、マトリックス型年間指導計画は、多く活用されるようになってきている。(国立教育政策研究所「評価方法等の工夫改善のための参考資料」小学校国語事例2参照)
 - ・ 年間指導計画については、年度当初に指導計画を作成するのみならず、指導と評価の状況を踏まえて修正を加えるなどして、継続的に授業改善に活用するよう配慮する。
- ③ 指導に生きる学習評価の一層の推進
 - ・ 単元の評価の観点設定について
 - 「国語への関心・意欲・態度」→基本的にどの単元でも設定する。
 - 「話す・聞く能力」「書く能力」「読む能力」
 - 当該単元で重点的に指導するものを取り上げて設定する。

いつでも 5 観点、いつでも 1 単元 1 領域ではないことに留意する。

目標・学習・指導・評価で一貫していることが重要である。

「言語についての知識・理解・技能」→基本的にどの単元でも設定する。

各領域を通して指導する。

- ・ 評価規準については、指導事項の文末表現を変えただけの記述も見られるが、指導事項をよりはっきりさせるために、当該単元で取り上げる指導事項とそれらをどのような言語活動を通して指導するかを明確にして、より具体的に評価規準を設定することが重要である。

(2) 各教育委員会における指導上の留意事項

① 学習指導要領の趣旨を生かす授業づくりへの支援

- ・ 学習評価とも関連させながら、年間を見通して、本単元で取り上げる指導事項と言語事項の妥当性の吟味を行う。1 単位時間の教師の発問や児童の反応だけを取り上げるのではなく、単元全体を通して付けたい力を、年間の見通しの中で確定していくという共通理解をしておく。

② 域内における公開研究会等による効果的な発信

- ・ 授業公開やモデル校の指定など具体的な姿で、適切かつ効果的に発信していく。また、モデル校については、学校と教育委員会が指導案検討段階から協力するなどの工夫をし、より具体的、効果的な発信の場となるように心掛ける。

③ 学習指導や学習評価の改善のための研修会の実施や参考資料等の作成・普及

- ・ 国立教育政策研究所が出している「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」等を活用して、指導と評価の状況を常に踏まえ、継続的に授業改善に結び付けていくような取組を推進する。

2 平成 24 年度全国学力・学習状況調査の調査問題の趣旨等

(1) 4 年間の調査結果から成果として考えられる内容

- ① 「書くこと」における成果……内容に合わせて小見出しを書くこと。
- ② 「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」……漢字を読むこと。
- ③ 問題形式に即して捉えた成果……比較的自由度の高い条件で記述すること。

(2) 4 年間の調査結果から今後の取組が期待される内容のまとめ

① 「話すこと・聞くこと」の学習指導のポイント

- ・ 司会の役割を果たしたり、立場や根拠を明確にしたりして話し合うことに課題が見られることから、学年の段階に応じた司会の経験と自分の立場・意見と根拠とを論理的に結び付けながら話し合う指導の充実が求められる。

② 記述する力を高めるための学習指導のポイント

- ・ 記述とは、書くことに焦点化された行為ではあるが、「書くこと」の領域の指導だけでは十分とは言えない。「読んだことを書く(記述する)」「話すことを書く(記述する)」「聞いたことを書く(記述する)」など、3 領域 1 事項に係る様々な活動を効果的に関連させることが重要となる。また、発達の段階に応じて、必要とされる記述の中身を明確にし、系統的・計画的に指導することが求められる。

- ・ 記述の指導の具体的な視点として、

* 記述の時間と場の保証 * 記述のテーマや題材の選択 * 記述の目的と動機付け
* 条件等に即した記述 * 記述した内容等の交流と評価 * 継続と日常化を図る記述
などが考えられる。